

観光文化

Tourism & Culture



財団法人日本交通公社

特集◎ 仏教ルネッサンス — お寺と社会の縁起復興

◆巻頭言

寺の鐘の音 山折哲雄……①

◆特集

- お寺と慈悲ある社会の再生を考える 上田紀行……②
- お寺の原点回帰—社会に参加する仏教の実践 秋田光彦、山口洋典……⑥
- 現代に生かす常照寺の伝統と精神 奥田正毅……⑩
- 語り部歌手と仏教 高岡良樹……⑭

◆連載

I あの町この町 第22回

秘境の発見 — 福島県・檜枝岐村 池内 紀……⑱

II 明治のジャパノロジスト F. ブリンクリーの「美しい国ニッポン」①

武士道で“入亜脱欧”した若き英国騎士 沢木泰昭……⑳

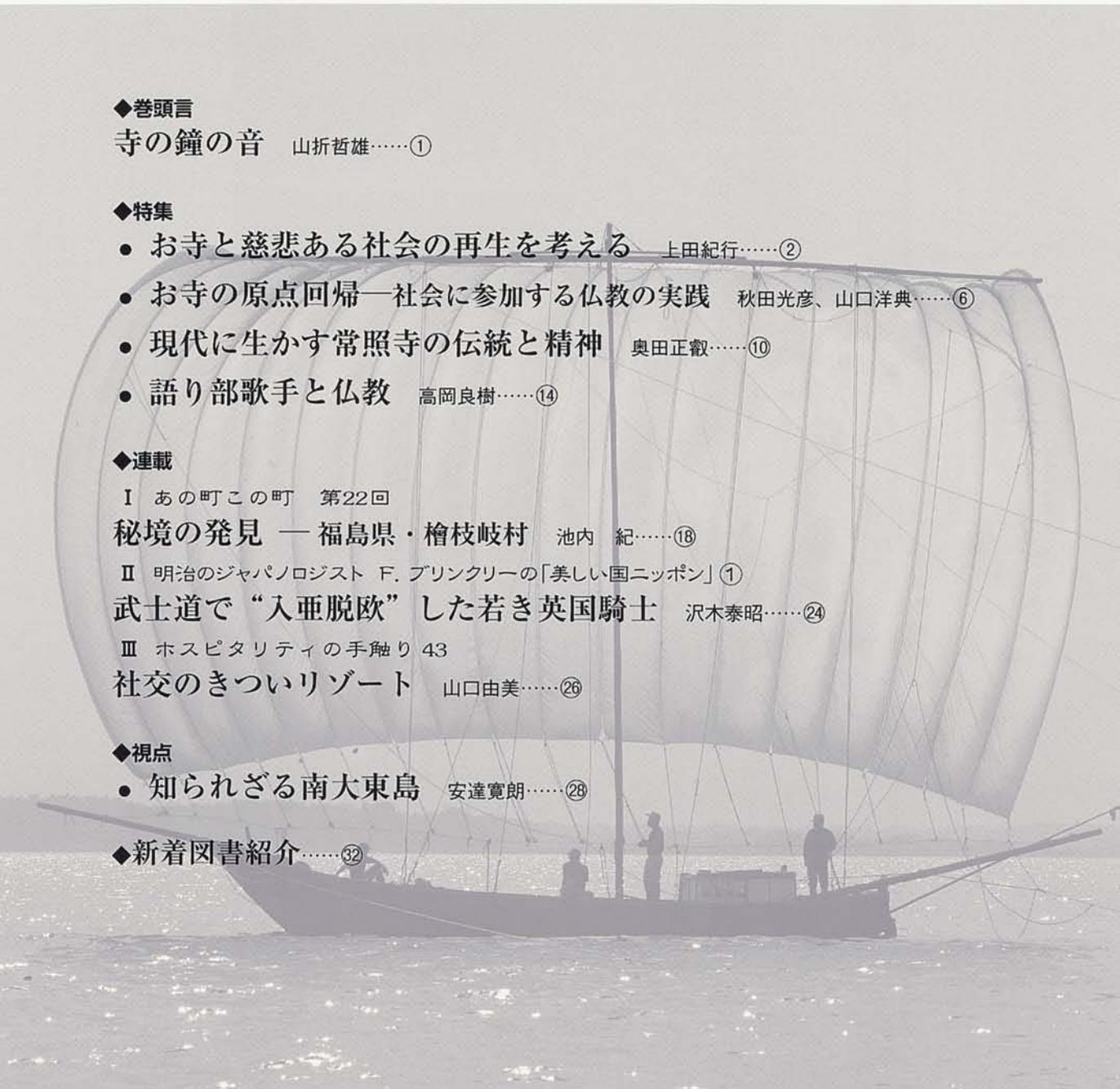
III ホスピタリティの手触り 43

社交のきついリゾート 山口由美……㉔

◆視点

- 知られざる南大東島 安達寛朗……㉘

◆新着図書紹介……㉚





— 切支丹の里・ド・ロ様ソーメン —

長崎県の外海^{そと}町(現・長崎市向町)は、西彼杵半島の南西端に位置する。美しい海岸線は「日本のリビエラ海岸」とも呼ばれている。

十四年前、町おこし運動の一環として自然を生かした「河川公園」づくりを進めていた。環境庁が全国有数の清流川として折り紙をつけた神浦川は「ダクマンチョウ」(手長工ビ)の宝庫だけに自然復元型の河川環境づくりに取り組み、成功を収めて県内はじめて全国にその重要性をアピールしていた。

今回は厳しい歴史の中で信仰に生きた切支丹の里に触れてみたい。遠藤周作の『沈黙』の舞台となった切支丹の里。歴史をひもとけば、ド・ロ神父ゆかりのフランス・ヴォシュロール村との国際交流を含めた文化事業も実施してきた。深い人間愛で布教に努めたド・ロ神父は、住民たちの生活の糧にそうめん作りの技術も広めた。今、地場産業となり「ド・ロ様ソーメン」の名で全国に出荷されている。心温まる歴史的風土が何とますがすがし。

(写真・文 樋口健二)

私は今、京都の洛中に住んでいる。早朝や暮れ方に、寺で鳴らされる鐘の音に耳を澄ますことがある。だがそれも、このごろはだんだん間遠になっていく。京都でさえそうなのだから、ほかの土地では寺の鐘の音を聞くことなどほとんどなくなっているのではないだろうか。

童謡の「夕焼小焼」に、

夕焼け小焼けで 日が暮れて

山のお寺の 鐘がなる

・・・

の歌詞が出てくる。鐘の音が聞こえてくれば、子供たちよ、カラスと一緒に家に帰ろう、という呼びかけのメッセージである。

考えてみればわれわれの社会は、近代の幕が上がるまでの千年の間、寺で鳴らされる鐘の音を聞いて毎日の生活を営んできた。起床や労働がそれで始まり、集会が行われ、市場が立った。勤行や作務、そして食事がそれを合図に始められた。

子供たちの遊び場だった寺の境内も、夜が近づき時を刻む鐘が響けば去らなければならない場所だった。闇の訪れとともに、そこは森と樹林に覆われる静寂の別天地に変貌したのである。

事情は西欧においても同じだった。どの土地を旅して

寺の鐘の音

宗教学者

山折 哲雄

いても、都市や村の中心に教会が建ち、その前が広場になっていく。教会が鳴らす鐘の音によって祈りと労働の時間が刻まれ、行事や商売の話が始まる。時に犯罪人の刑場へと転換することもあった。京都においても、六条河原などで処刑が行われるときは鐘の音が響いていたのではないだろうか。

縁日や祭日ともなれば、寺の門前は市をなし、時に喧騒の渦を巻き込んで晴れの舞台に変貌する。ファッションとグルメを競い合う交流の場となった。盛り場の拠点がそのようにしてつくりられ、その寺の参道が門前から始まる巡礼路へとつながり、さまざま旅のルートが出来上がっていったのである。

寺院の歴史をはるかに眺望すれば、そんな姿が浮かぶ。寺の上空には、いつでもゴーンという鐘の音が響いていたのである。人々の心にしみ入る、美しい宇宙のこだまだったと言ってもいい。暮らしの中のさまざまな営みを、生き生きとよみがえらせる時の刻みだったのである。

その寺の鐘の音が、今日、いつのまにか途絶えようとしている。これからの時代、果たしてどんな新しい鐘の音を響かせるのか、寺院には思い切った知恵と工夫が求められているのではないだろうか。

(やまおり てつお)

仏教ルネッサンス

お寺と社会の縁起復興

高度経済成長の果てに心の拠り所を見失ってしまった今日。仏教、お寺さんと私たちはいかに向かい合っていくべきか。「葬式仏教」というイメージを打破すべく寺の活力回復を目指した「仏教ルネッサンス」という動きが始まりつつある。今号では、お寺と社会の縁起再生で日本仏教の復興に取り組むさまざまな活動を紹介する。

お寺と慈悲ある社会の再生を考える

東京工業大学大学院准教授

上田 紀行

仏教ブームだといわれる。多くの仏教書が刊行され、由緒あるお寺は観光地としてにぎわっている。

しかし、一般のお寺の活動に対してのイメージはどうだろうか？と聞かれれば、多くの人はネガティブな答えを返すだろう。葬式と法事はかりやっつけていて、その葬式や法事もありがたくないし、一部の寺は法外なお布施を要求する……といったような。

そうした「葬式仏教」といったイメージに覆われた日本仏教の水面下で、日本仏教

を復興させ、全国に六万以上ある寺の活気を取り戻そうという、「仏教ルネッサンス」ともいべき動きが始まりつつある。私自身、四年前に「二世紀の仏教の可能性を探究する」場である「仏教ルネッサンス塾」をスタートし、若手僧侶が宗派を超えて日本仏教の未来を語り合う「ポーズ・ビー・アンビシャス」という集いも既に八回を数えた。

そして全国各地に、さまざまユニークな活動に取り組むお寺が確実に増えている。

例えば長野県松本市の神宮寺では、地域を「ケアタウン」とする計画のもと、寺のケアを目指す。夫からエイズをうつされ、その夫も失い未亡人となってしまったタイの母親たちに作務衣を縫ってもらい日本で売るといふ、海外援助プロジェクトにも取り組む。また葬儀や布施の不透明な部分をクリアにし、一人ひとりが納得し自分で作り上げていく葬儀法要にといった、いわゆる「葬式仏教」の改革も進めている。



21世紀の仏教像を追究する「仏教ルネッサンス塾」(東京・青松寺)

大阪市の應徳院は、前衛演劇の場として若者を集め、同時に若者のキャリアデザインのエンパワーメントの場とすることで、年間三万人もの若者が集う場となっている。また、引きこもりの子どもたちを引き取って力づける寺や、自殺問題に取り組み寺もある。私はそうした「活きた寺」の活動を『がんばれ仏教！お寺ルネッサンスの時代』(二〇〇四年、NHKブックス)で取り上げたが、そのような「未来志向」の寺は各地で活気のある場を作り出している。

「仏教」は後ろ向きなものではない。確かに現在一般に流布しているイメージは、「過去を向いていて、現在や未来にはかわからないもの」、「葬儀や法要を執り行うもの」であり、現実の問題にはかわからないもの」といった、否定的なものである。しかし、そうした一般の認識からすれば意外なことに思えるかもしれないが、仏教とはどの時代においても極めて「現代的」なものであり、その「現代性」、あるいは「前衛性」こそが仏教の命脈をここまで保たせてきた核心であった。

そもそも、「伝統的」なバラモン教が儀式主義に陥り、民衆の苦悩を救い取ることができないとして、革新者として現れたのが釈迦その人であり、彼を支持したのは伝統にとらわれぬ新興資本家たちであった。日本に仏教を定着させた聖徳太子はまさに新時代の日本を創造した「前衛」そのものである。そして最澄や空海といった、時代を生きるスーパースターというべき人物たちによって日本仏教は大きな勢いを得ていくが、その後仏教が比叡山にこもって保守化し民衆の救いに届かなくなると、法然は山を下りる決断をし、親鸞、道元、日蓮といっ

た個性あふれる鎌倉仏教の祖師たちがそれに続いていく。

時代に向かい合うことのない仏教が「伝統的」で「正統的」だというのならば、それはむしろブツダが生まれた当時の儀式宗教化したバラモン教に近い。しかし皮肉なことに、日本人の多くは現在の日本仏教をブツダ当時のバラモン教であるかのように受け取っている。葬式や法事といった儀式は執り行うが、その教えと実践はわれわれが抱えている現代の問題には何の関係もない。そう考えている人の何と多いことか。

しかし、日本の仏教寺院は葬式の間だけではない。古来から多様な活動のセンターとして存在してきた。そこには「癒やし」「学び」「楽しみ」といった機能があった。聖徳太子によって日本で初めて建立された四天王寺にして、四つの建物の中の三つまでもが病院、薬房、療養所といった癒やしのある場であった。また寺子屋といった学びの場、さまざまな歌舞演芸が勧請される楽しみのある場もあった。しかし明治以来これらの機能が病院、学校、商業娯楽等に奪われてしまい、寺は「葬送」だけに特化させられてしまった。だから、寺の再復



若手僧侶が宗派を超えて語り合う「ポーズ・ビー・アンビシャス！」(青松寺)

そうした「仏教ルネッサンス」を志す寺と僧侶に共通しているのは、「言葉(だけ)の仏教」を脱して「関係性の仏教」に転換するという、社会的な視点である。仏教が言語化された「教え」という言葉、哲学を目指すのか、それが実際に社会化において実現されるという実践を目指すのかという問題である。

興のためには、葬送の透明化・現代化を進めるとともに、そうした古来からの多様な寺の機能を取り戻すことで、地域の拠点となるという「ルネッサンス」が必要なのがある。

られ揺るぎないものとなっているがために、逆に仏教者たちは「現実の苦」を見られなくなっているのではないか。仏教とはその時代その時代において、新たな苦に向かい合い、その構造を明らかにし、教えを改訂

しながら進んでいくという実践なのだが、現実を起こっていることは、既に確立した「教義」における「苦」の定義から現実を見るところ、転倒した方法である。これでは最初からその過去の教義に見合ったものしか見えない。時代がどのように進もうとも、教義は変更の必要もなく、「偉大なる真理は不滅であり永遠である」と言ってさえいればいい。

こうした教条主義に陥った仏教を強く批判し、現実の社会的苦悩と向かい合うことを主張する動きが、一九七〇年代から海外では非常に強い潮流を生み出してきた。私は昨年十二月にダライ・ラマと二日間にわたる対談を行い、先ごろ出版したが、『目覚めよ仏教！ダライ・ラマとの対話』NHKブックス)、ダライ・ラマは、仏教は教えを盲信することではなく、常に現実の問題とのすり合わせにおいて臆断や誤謬を超えていく、現代に生きるものであると強調する。その視点から見れば、これまでの日本仏教の在り方は、自分の宗派の教義を盲信し、臆断をもって時代に対してしているかのように見えてしまう。



ダライ・ラマと2日間にわたり対談【『目覚めよ仏教!ダライ・ラマとの対談』NHKブックス】

社会的な視点を強く持つ仏教者は、仏教における「慈悲」の実践を強く主張している。そもそも大乘仏教は、それまでの仏教が自分の解脱を目指す「自利行」にとらわれており、乗り物の小さい「小乗」仏教であるとし、衆生の苦しみの救済のためならいかなる自己犠牲も辞さないという誓いを立て、

実践するという「利他行」、すなわち「菩薩行」をその教えの中核としている。その大乘仏教の原点からすれば、衆生の苦しみに向かい合うというのは、あまりに当然すぎるほど当然なことである。

また、ダライ・ラマは「仏教者は社会的不正に対して、慈悲から生ずる怒りを持つのが当然だ。そしてその怒り、憤りを原動力にして、勉学と修行に励み、人々の苦しみを何とか救いたいと立ち上がるべきである」と述べる。それは「何があっても毎日ニコニコ生きるのが仏教的生き方」といった、日本仏教にありがちな俗流の教えとは全く異なる真摯さを持っている。日本仏教は仏教全体が「教え」のほうを向いていて、「慈悲は説くが、慈悲は実践しない」といった状態に陥っている。「教え」は深遠で高邁だが、実際の実践は「葬儀」であり、その葬儀もありがたくもなく宗教的でもないといった不満を持つ人々が多い。真の仏教ルネッサンスをもたらすた

めには、教えと実践の一致、慈悲の実践こそが必要なのである。

ここで真の改革が行われなければ、日本仏教の未来は非常に暗いものとなるだろう。寺離れが進み、多くの人々が葬儀すら寺に頼まなくなるかもしれない。真に現代的な仏教への変革が必要だ。「仏教ルネッサンス」では、危機感を持った若手僧侶が宗派を超えて語り合ってきた。宗派間の対話はほとんどない日本仏教界において、単に自宗派のみの閉じられた視点ではなく、いま一度「日本仏教」の大きな流れに立ち返り、現代の問題に立ち向かうことが求められている。それとともに、一般の在家者の側も仏教に期待感を持ちつつ、ある時は厳しく意見し、ある時は励ますという、生産的なコミュニケーション作りが必要だ。仏教は何よりも日本文化の大きな流れである。それを活かすか殺すかは私たちの未来に大きくかわってくる重大事なのである。

(うえた のりゆき)

お寺の原点回帰——社会に参加する仏教の実践

大蓮寺・應典院 住職

主幹

秋田 光彦
山口 洋典

三ナイ寺院・應典院

「檀家・葬式・お墓なし」

「應典院の特徴は、とにかく日本でいちばん、若い人たちが集まる寺だということだ」

『がんばれ！ 仏教』（NHKブックス）という書物にて、上田紀行氏は應典院をこのように語った（113ページ）。事実、應典院には年間約三万人が集っている。その大半が二十代から三十代なのだ。なぜこれほどの若い人たちがお寺に集まるのか、上田氏は、住職ほか関係者へのインタビュー等を通じて、建築の様式と、多彩な実践の様子、そしてその背景を明らかにした。

本稿は、應典院というお寺が掲げる三つの理念、「ひとが、集まる」、「いのち、弾ける」、「呼吸する、お寺」という言葉を手掛かりに、取り組みの本意、交流の様子、今

後の展望について述べるものである。この三つの理念は、應典院の封筒やスタッフの名刺に刻まれた、言わばキャッチコピーだ。お寺にキャッチコピーというのは、なんだか妙に聞こえるかもしれない。しかし、そうして人をキャッチしていく姿勢を、文字にコピーして、世の中に発信している應典院は、一九九七年にお寺の原点回帰をねらって再建された浄土宗寺院である。

鉄とガラスとコンクリートによる現代建築として再建された應典院が型破りなのは、伽藍の建築様式だけではない。三百五十年の歴史を有するものの大阪大空襲で被害を受けた大蓮寺の塔頭寺院だが、檀家制度を取らない、葬式をしない、だからこそ墓もない、という新たな理念を掲げて再建したことによる。直径十四メートルのコンクリート造りである本堂ホールを有す

る劇場寺院は、宗教宗派を一切不問とする会員制組織「應典院寺町倶楽部」によって運営されている。仏事の代わりにお寺でなされるのは、年間約五十本の演劇や十本程度の映画、およそ七十本のNPO等による講演会や研修会だ。本稿は、このような仕組みと仕掛けを通じて、言わば「確信犯的」に、これまでのお寺の概念を疑いつつ、お寺の在るべき姿を模索し続けている應典院のこれまでと今とこれからを、應典院の「本寺」である大蓮寺の住職と、葬式をしない僧侶として應典院で事業統括責任を担う主幹の二名の合作でつづるものである。

「ひとが、集まる」

場所の力を求めて

應典院が「日本でいちばん、若い人たちが集まる寺」となった背景には、地上げが



「人が集まる」をテーマに再建された應典院

激しいバブル期に再建計画が議論され、本寺である大蓮寺の檀家さんとの協議のなかで「若い人に親しまれるお寺に」というテーマが持ち上がったことからである。

都心という人や物やお金が行き交う街で、現代的なお寺はどのような姿となるのかを模索するなか、その手掛かりは、タイやベトナムなどアジアの仏教国で、僧侶が伽藍から貧村へ移住しながら、地域の団体とともに開発にかかわる実践行にあった。当時大蓮寺の副住職で、再建される應典院の住職に就く第一筆者（秋田）は現地に赴き、農地開拓や、起業支援や農民の収入が増えるような米の自主配給ルートを作るなど、社会に参加していく僧侶の姿に感銘を受けた。建築家でもある一心寺の高口

恭行住職（当時）に設計を依頼し、都市論を専門とする京都精華大学の橋爪伸也助教授（当時）をアドバイザーに迎えて「應典院コンセプトブック」の起草を仲間とともにに行った。

ハード（伽藍）とソフト（取り組み内容）との調和を図っていった姿勢は、まさに都市計画、街づくりの発想と実践であった。しかし、應典院が演劇や映画、現代アート、それらの表現の拠点として場所を開く発想に至った背景には、社会を震撼させた一連のオウム真理教の事件が無関係ではない。実際、それらの前で、既成仏教はあまりに無力であり、また無自覚ですらあった。しかしもはや、若者の悩みは、伝統的にお寺が扱ってきた「貧・病・争」、すなわち貧しさや病みや争いなど、原因が明確でその要因を除去すれば解決するような問題ではなく、人々の関係の有り様を紡ぎ直していく機会を持つことが大切ではないかと考えた。インターネットや携帯電話など、人と人の関係を取り結ぶ手段において、道具ばかりが進化している時代だからこそ、人生に問いを持つ若者たちが、集い、語り合える場所をと、應典院は「ひとが、集まる」お

寺に、現代的な救済の姿を見いだしたのだ。

もちろん、應典院は、再建当初から、年間三万人が訪れるお寺であったわけではない。再建一年目の秋に行った演劇祭は、自らの表現活動を行うホームグラウンドとして應典院を選ぶ人々を生む契機となり、徐々に利用いただく方々の輪が広がっていった。ここで鍵となるのは、ドロレス・ハイデンという米国の建築学者が訴える「場所の力」の大切さである。同氏の著書によると、「場所の力」とは「日常生活の風景から地域への愛着を抱くこと」とあり、まさにこの指摘の通り、應典院という風景への愛着を持つ人々の登場により、應典院は「場所の力」を持ち、「ひとが、集まる」引力を高めていったと言えよう。

「いのち、弾ける」他者と出会う

場所を開いて積極的な表現活動を奨励することが、お寺による現代的な救済となるのは、現在は社会の制度に位置付いている多くの公共事業が近代化以前にはお寺によって担われてきた、すなわちお寺の原点回帰ではないか、という観点によるところである。実際、日本で庶民に開かれた最初

の学校は、平安時代に空海が創設した綜芸種智院である上、近世に僧侶以外にも含めて多様な形態の私塾として普及していった寺子屋の名前にも埋め込まれているように、そもそも地域の「学び」の拠点はお寺であった。また、日本で最初に仏教が伝来した大坂の四天王寺が儀式や学問などと併せて医療と福祉の総合拠点となってきた歴史と、寺院に定住せず地域の要請に基づいて土地を開墾し川に橋を架けるなど、浄土教信仰を庶民に普及させていくために諸国を回っていた「聖（ひじり）」の活躍に、「癒し」の活動の原点を見ることができると。さらに、寺、神社の敷地で営まれ、仏様や神様に奉納する形で発展した芸能は、中世以来、寺の建立や本尊を新調した際に浄財を求めめる勧進興行の形で「楽しみ」の文化を栄えさせた。

かくして寺院は教育、福祉、芸術文化の拠点として地域の暮らしに根差し、人々のいのちを支える場所となった。しかし、いのちを支える事業が行政や資本によるサービスとして社会化と制度化が進むなか、お寺と地域のつながりは葬式を通じたお寺と檀家のつながりのみを残すところとなっ

てしまった。だからこそ、應典院は「いのち、弾ける」というキャッチコピーを掲げている。葬式という儀礼をよりどころにした地域とのつながりではなく、いのちを生きていくことそのものから、新しい関係を取り結ぶ大切さを訴えるためだ。

應典院が京阪神地区のNPO等との連携のなかで事業を展開するのも、公共的な問題解決の活動には、人間らしく共に生きていく「いのち」の実践との共通項があり、相互に協力し合うべき仲間であるという認識に立つためだ。例えば、應典院では二〇〇〇年より、秋から冬にかけて展開されるアートとNPOの総合芸術文化祭「コムズフェスタ」に取り組んでいる。そうしたイベントの場に集う表現者の真摯な姿勢は、應典院という空間に流れる時間に彩りを添え、その価値と魅力を高めてくれる。驚田清一氏は著作『弱さのちから』で、人と人のつながりを「交感」と呼んでいるが、お互いに交わり感じ合うこと、つまり、應典院が、個人の弱さを他者とのつながりで支えられる場所となることは、應典院そのものが「いのち、弾ける」場を醸成する機会になっている。

「呼吸する、お寺」 社会参加仏教の実践

應典院はよく「イベント寺」との指摘を受ける。しかし、ここまでつづつてきたように、應典院は、お寺が担ってきた地域の生活を支える機能を現代的に取り戻すために、自責（なぜ、若者はオウムに走ったか）と自戒（お葬式をしない）の念から、仏教界に、また地域に対して挑戦と挑発を行っているのである。無論、これらの問いは伝統的な仏教の単純な批判でも、全面的な否定でもない。例えば、誰にもやってくる人生最後の「イベント」であるお葬式さえも、もはやお寺ではなく葬儀会館等でなされているなか、お寺は何をなすべきなのか。こうした問いに向き合っているのが應典院なのだ。

「社会参加仏教」という言葉がある。二〇〇六年十月三十一日に、應典院にお招きしたランジヤナ・ムコバティヤーヤ名古屋市立大学助教授(当時)が提唱する「Engaged Buddhism」の日本語訳である。同氏による著作『日本の社会参加仏教』によると、「出家を重視するゆえに社会参加のための倫理を提供することができないと思われてきた」

仏教に対し、ベトナム戦争への反戦運動、ダライ・ラマを中心とするチベットの政治的・宗教的解放運動、スリランカの仏教徒や僧侶による農村開発「サルボダヤ運動」など、新たな萌芽に対する名付けであるという。應典院もまた、この社会参加仏教の実践主体だという自負がある。

鉄とガラスとコンクリートでできた現代建築を拠点に、今を見つめてきた應典院は、最終的な目標を地域の在宅ホスピス支援拠点の形成に置いている。団塊の世代が一斉退職を迎える「二〇〇七年問題」は、程なく到来する多死社会の端緒だ。年間百七十万人が亡くなる時代に向けて、役所や病院だけではなく、家族とともに地域全体がいのちを支えていくための専門家によるネットワークを構築しようという構想である。例えば、末期を迎えつつある高齢者に、應典院で表現活動を行ってきた若者たちが静かに寄り添う、そ



「看取り文化の新しいデザイン」をテーマに、演劇とトークイベント

んな「呼吸する、お寺」のさらなる進化と深化に、地域はどう反応するか、よい間合いを見いだしたいと願っている。

(あきた みつひこ)
(やまぐち ひろのり)

現代に生かす常照寺の伝統と精神

京都市 常照寺住職

奥田 正叡

はじめに

常照寺は洛北鷹峰の丘陵にあり、俗に鷹峰・鷲峰・天峰の鷹峰三山と呼ばれるなどらかな三つの山を西に望む所に位置している。

当山は、一六一六年（元和二年）本阿弥光悦の土地寄進と、その子、光瑳の発願により身延山第二十一世日蓮宗中興の祖と敬仰される寂照院日乾上人を招じて開創された鷹峰檀林の旧跡である。檀林とは、学室ともいい、戦国争乱の終結を機に仏教各宗派が僧侶の教育機関として全国各地に設けた学問修行所のことをいう。近世日蓮宗の檀林は天正年間から元禄年間に至る約百五十年間に關東八檀林・山城六檀林が設立され、向学に燃える学僧たちが雲集した。明治維新と同時に新学制が導入され、各檀林は廃檀となりそれぞれ普通の寺院に移行

していった。また当山は、寛永の三名妓・二代目吉野太夫の菩提寺として知られ、毎年四月第三日曜日には吉野太夫花供養が行われ春の京の風物詩として賑わいを見せている。

常照寺でのボランティア活動

平成七年に阪神淡路大震災が起きたとき、私は「薄伽梵Kyoto」の一員として炊き出しや給水活動、慰霊法要やハンドタオル配布などのボランティア活動を行った。薄伽梵Kyotoは、京都在住の超宗派の青年僧侶で結成されたボランティアグループで、主に病院や老人ホームでの法話や書道教室などのボランティア活動をしている。全国で初めて僧衣で病院や老人ホームで法話活動を行ったグループでもある。阪神大震災でのボランティア活動で感じたこと



阪神淡路大震災を契機にボランティア活動を実践

は、この機会に自坊の檀信徒と一緒にボランティア活動ができないかということだった。早速ボランティア活動の下見に行った。痛感したのは地震から五十日余たった被災地の悲惨さだった。避難所生活を続ける被災者たちは、プライバシーのない生活、物資の配給をめぐるトラブル、風邪の蔓延等、先の見えない生活の長期化にそれまで自分たちを支えてきた仲間意識が薄れ、抑えていた不安や不満、怒りなどで堪え切れない様子だった。

このような被災地の状況を自坊の信行会



近隣の老人を招待する茶会

で報告した。生命の不安から生活の不安さらに心の不安へと被災者の状況が変化していくなかで、どのような救援活動が被災者にとって必要なのか、そのなかでどのようなことが私たちにできるのか話し合った。その結果、被害の一番大きかった東灘区でお抹茶接待のボランティア活動をすることに決定した。避難所の体育館で雑魚寝する被災者たちにとってはプライベートな生活空間と時間がほとんどなく、野点席でのお抹茶接待が被災者たちに一時の安らぎの時間と空間を与えられるのではないかと考え



毎年、春・秋の茶会でお抹茶の接待

たからだ。

三月五日午前九時、東灘区魚崎小学校に到着した私たちは校庭の木陰の一角に緋傘と床几を並べて茶席を設け、脳内にアルファ波を発生させる音楽をBGMに約五百人の被災者や他のボランティアの方々に抹茶の接待をした。参加した十二人中八人は和服姿で奉仕した。被災地だからこそ正装でお茶をもてなすことが大事だと考えたからだ。普段お稽古している茶道の「もてなし」の世界があでやかに避難所に展開された。殺伐とした避難所に設営された茶席は異次元の空間に思えた。日本文化という「間」だと感じた。

このような阪神大震災でのボランティア活動をきっかけに、信行会の一層の活性化と檀信徒の組織化を目的として、信行会に信行・文化・パソコン・ボランティアの四つのプロジェクトを設けた。

阪神大震災から十二年。社会に門を開けた寺院づくりを目指し、毎年ボランティア茶会を催している。

このボランティア茶会は、春の新緑茶会と秋の紅葉茶会である。どちらも近隣の老人ホームや老人保健施設など福祉施設に入

所している方々約九十人を招待して行われている。お茶会と同時にバイオリンと電子ピアノ、大正琴などの演奏会も行われる。歌詞カードを配り、リクエストに応じて生演奏していただき楽しい合唱も行われる。

このボランティア茶会の特徴は、檀信徒だけでなく福祉施設関係者や学生ボランティア、それに一般ボランティアが参加する合同茶会ということである。送迎には仏教大学や京都産業大学の学生ボランティアグループが参加し、会場の設営や運営、片付けなどは当山檀信徒が担当する。楽器の演奏は外部の講師が奉仕してくれる。

檀信徒は車いすの出入りの世話や、お茶席ではお菓子から抹茶の点で出し、水屋などのすべてを運営する。

このボランティア茶会には檀信徒たちがお互いに声を掛け合い誘い合って参加している。共に行動することで異体同心の心が伝わり、信仰的教化に発展していく。ボランティア活動は、相手のためにするのではなく、自分のためにさせていただく菩薩行であると毎回確認している。自分たちの修行のための催しであることを忘れてはいけない。

茶会の費用には、毎冬行われる町内をお

題目を唱えながら練り歩く寒修行の浄財が充当されている。

信行会でのボランティア活動を檀信徒教化の場としてとらえると、以下の点が指摘できる。

- ① 檀信徒間のすそ野の広がりや団結力が高まった。
- ② 理論だけでない生きた教化の実践の場となった。
- ③ 高齢化問題が他人事ではなく共通理解となった。
- ④ ボランティア活動の場が信仰の自己表現の場となった。
- ⑤ 外部のボランティアとの連携ができた。
- ⑥ 時代に沿った寺の方向性ができた。
- ⑦ 社会のニーズに敏感になった。

ボランティアと法華経精神

私たちが行うボランティア活動は、法華菩薩道の実践だと思っている。以下、法華経におけるボランティア活動の基本理念について私見を述べたいと思う。

- ① 『妙法蓮華経提婆達多品第十二』には、「我をして四攝法を具足せしめたり」と説かれている。この四攝法とは、布施・愛語・利行・同事の四つの菩薩の修行のことである。



ボランティア活動は「法華菩薩道」の実践

布施とは他の人のために物や行為を施すこと。愛語とは思いやりの言葉を施すこと。利行とは他の人のために役立つこと。同事とは相手の立場に立つこと。

四攝法中、布施行には「三輪（施者・受者・施物や行為）清浄」の原則がある。布施行は元來施者の執着を取り除くための修行である。施者・受者が同一立場というのが第一の基本原則なのである。つまり上から物を投げるような施しは布施行に相当しないのである。第二は与える物や行為に執着があつては布施行は成立

しないということである。施すことができるのに実行しない人は我欲を増長させる。反対に、できないのに布施しようとするれば、相手から見返りを求めるようになる。つまりケチもムリも執着なのである。布施行の精神は一般ボランティアの基本原則の無償性に通じる考え方である。宗祖日蓮も『食物三徳御書』で「人に物をほどこせば我が身のたすけとなる」と述べ、布施行は自分自身の執着を捨てるための修行であると説いている。

さらに日蓮は『日本真言宗事』では「菩薩の用心は慈悲を以て本となし、利陀を以て先と為す」と菩薩行としての利他行（相手のための修行）を説き、『守護国家論』では「先に愛語を以て其意に随い」と愛語施の重要性についても述べている。日蓮遺文に説かれる利他行や愛語施は一般ボランティアの基本原則の自発性に通じるものがある。

日蓮は『異体同心事』に「異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶うことなし」と述べ、同事についても論及している。これは一般ボランティアの基本原則の連帯性に通じるものである。

②一般ボランティア活動の「無償性・自発性・連帯性」という基本原則は、「共生」の精神で貫かれている。

『妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十』には「我深敬汝等（私は汝たちを深く敬います）」と言って老若男女貴賤上下を選ばずすべての人に合掌礼拝行を実践した常不軽菩薩（じょうぶきょううぼさつ）の物語が説かれている。お釈迦様の前世の修行の姿である。

法華信仰の篤かった宮沢賢治は『雨ニモマケズ』の詩に木偶坊（デクノボ）精神を綴った。賢治は総ての人々の幸福を願い合掌礼拝を続けた常不軽菩薩の生き方を目指したのである。この常不軽菩薩の人間礼拝・仏性礼拝の精神こそ「共生」の精神に通じるものと考えられる。

日蓮は『法蓮鈔』の中で「そもそも法華経を持つと申すは、経は一つなれども、持つことは時に随いて色色なるべし。時を知りて法華経を弘通するが第一

の秘事なり。たとえば、渴者は水こそ用うる事なれ……。裸なる者は衣を求む、水は用なし」と述べている。時に応じ相手の求めに応じた教化の必要性は、まさにボランティア精神そのものである。

（おくだ しょうえい）



ボランティア新緑茶会（平成 19 年 5 月 13 日）

語り部歌手と仏教

吟遊詩人

高岡 良樹

民話との出会い

歌手人生に四十の坂の登り口が近づいたころだった。それまで低迷していた音楽活動が、頭上から春の光が差し込んできたように展望が明るくなった。

〈歌物語〉と名付けた、物語を歌い語る創作が、長いスランプから民話を歌い語る方向へ、進路が開けたのだ。

今その頃を思い返してみると、フォーク歌手と呼ばれて、戦争や政治の腐敗など、社会のさまざまな矛盾を歌にして歌う歩みが、日本の歴史の中で語り継がれてきた民話の世界と出会い、生きとし生けるものの喜怒哀楽を歌うという方向に転換したのだった。

それに伴って、昔の琵琶法師や浄瑠璃語りの伝統を踏まえて、ギターを弾き歌う語

り部でありたいという理想が心に燃え出し、歌手への執着心を捨てて、語り部の道を歩き出したのだ。

仏教のことを知りたいという思いが、ほこほこ胸にわき出したのもこのころからだ。

仏縁という縁を信じるなら、私は仏からの授りっ子のように思える。父は八歳、母は十九歳の時に死に、仏となった両親を私はずっと供養してきた。

父は青年期の数年間、日蓮宗の僧になって諸国を行脚したと聞くし、母は墓参りの好きな人で、幼少の私は月に何度も親族の墓参りに連れていかれた。墓前で唱える般若心経は、線香の香りのように私に染み込んだらう。

菩提寺は浄土宗で、先々代の住職が優し

いお爺ちゃんだった。母に手を引かれた私を「坊主、よく来たな」と抱き上げてくれた。その慈愛に満ちた笑顔と抱っこは、今も忘れ難く、私の寺好きの原点なのだと思う。

きつとお菓子もたくさんくれたであろう温かな記憶は、やがて戦争の激化とともに墓参が遠のき、東京大空襲で焼き尽きた。

青春時代に天涯孤獨となった私は、三畳一間の下宿へ引っ越すにも、仏壇と一緒だった。

新興宗教の人々から入信を勧められたが、仏教より演劇や音楽に興味は集中していた。今でも私の欠陥なのだが、一人っ子育ちで、組織や集団にはなじめないのだ。

墓との共生

不思議なことだが、幼少のころから家の近くには必ず墓があった。現在でも隣家は

石材店である。子供心には、お寺も墓地もみんな近所付き合いで、今もふるさとの風景の中にある。

だから私の住みたい街は、寺と庶民の暮らしが一体化している、東京なら上野周辺から駒込界隈などが好みだし、庭先を掃除している和尚さんと、朝夕の挨拶が交わされるような、暮らしと信仰が、歴史とともに熟しているような風土に憧れる。

その風土が醸し出す風景の中に立つと、祖先のふところへ還ったような懐かしさなのだ。

人々が日々の生活の平穏を願う思いは、象徴化すれば祈りの心だ。寺院にも教会にも出会えぬ街を歩いていると、セレモニーホールの看板がやけに目について、住民の暮らしの冷たさを感じられてならない。

昔の街づくりは、祈りの場を構想に入れて設計されたのではないか、公園墓地もいいが、新しい寺町づくりをせねば、日本人の暮らしの伝統はもつと枯れていくだろう。

めぐめ

私の「歌物語」に仏教が初めて登場したのは四十歳のころで、「三井寺の晩鐘」という、琵琶湖の漁師の若者と、美しい娘（竜

神の化身）の愛の物語だった。遠い昔から民衆に語り継がれてきた民話や伝説の根底には、自然との、神仏との共生の姿がある。それは素朴でとても素直な信仰の姿なのだ。

語り部の仕事は、聴く人の心に、昔と今を語り糸に結んで伝えることで、昔を今によみがえらせるのが芸の力でもあるが、語り部の心が信仰心で裏打ちされていないと、物語にいのちが宿らないことに気付いた。

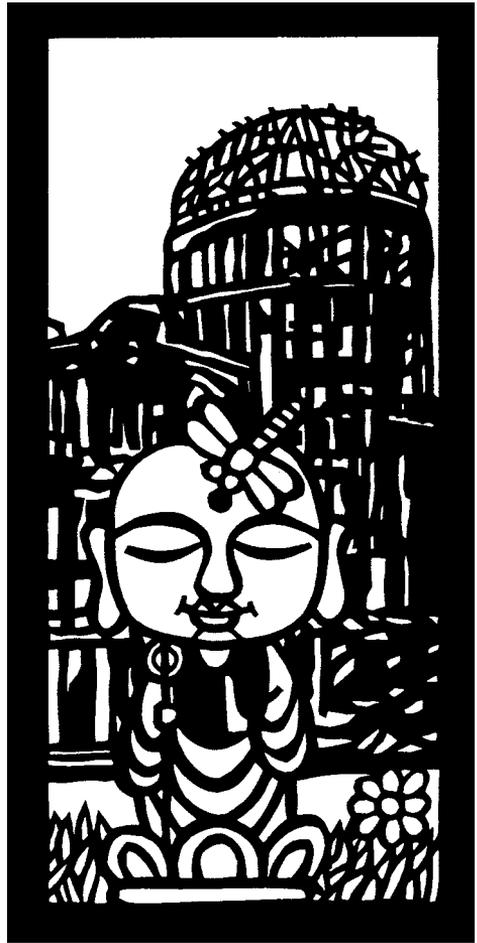
伝統芸能の世界の方々は、名人上手と言われる人ほど信仰心が深い。能楽も、文楽も歌舞伎も、その作品のほとんどが仏教で裏打ちされているのだから、道成寺の歌詞



語り部歌手の道を歩んで30年

も、勧進帳のせりふも、仏教を知らねば意味は半減してしまうのだ。
日本の芸能そのものが、仏教の布教のために生まれたもので、語り部歌手のルーツをたどれば、平家琵琶から声明へ、さらにさかのぼれば、神の言葉を告げる巫女が登場してくる。

そのころはまだそこまで知らなかったの



原爆投下時の広島のみ話「おこりじぞう」(切り絵:小堀隆治)

だが、「語り部歌手の道を歩むには、仏教のことを知らねば、これから先へは進めない」と私は自覚した。

仏教

母ゆずりの般若心経だけは暗記していたが、仏教徒の意識などなかった。

まず仏教書を開いて驚いたのは、専門用語をまったく知らないことで、これでは用語を覚えるだけで一生が終わってしまうだろうと身震いしたが、ともかく、それからの十年間は、週刊誌や小説を遠ざけて、仏教関係の本を読みふけた。

尊敬する仏教詩人の坂村真民さんが、テレビで「私は人に教えられて仏教の道に入ったのではなく、自分から入りましたから」と語っておられたが、私も勝手に仏教探究を始めて、あえて宗派にも師匠にもつかず、心服できる仏教書を求め、ただ一筋に釈尊の教えを実感したい願いが、胸中に燃えていた。

「おこりじぞう」という歌物語を、一九八四年から一年がかりで作った。仏教書を読み出してから約七年を経っていたが、悟りの心などからは程遠い日々だった。

しかし、マニア的な私の会話に、仏教の話題が多くなり、話相手から時には煙たがられ、音楽の仲間から、このごろ歌声がお経くさくなつたとアドバイスされた時期だった。

「高岡さんは仏教に詳しいから、来年のノーモアヒロシマ・コンサートで『おこりじぞう』をあなたに委嘱したいと言ってるんだけど、三井寺の晩鐘みたいな感じで作ってみたい？」音楽評論家のYさんから電話があつた。

長い間、人から頼まれない歌を作ってきた、委嘱という言葉は魅力的だった。

その平和コンサートのための創作委嘱を、私はたじろぎながら引き受けたのだが、それが本格的な仏教修業になるとは気づかなかった。

ヒロシマ

「おこりじぞう」は原爆投下時の広島のみ話で、被爆した少女と、お地蔵さんの奇跡の物語なのだ。

《笑い地蔵》のお地蔵さんが、戦後は《おこりじぞう》と呼ばれるようになった話で、広島の人たちが焦土から立ち上がるなかで

語られ、童話作家の山口勇子さんが作品化して、この話が日本中に広まった。

爆風に吹き飛ばされ、首から下が焦土に埋まった笑い地蔵の所へ、被爆した瀕死の少女がよろよろと来てくずおれる。

少女には地蔵の笑顔が母の顔に見えて、必死に水を欲しがるのだ。すると、笑い地蔵が仁王のような形相に変わっていき、渾身の力を振り絞り、体内の水分を涙に変え、ポトポトと少女の口へそ注ぎ込むのだ。

やがて、涙の水を飲み終えた少女の息が絶えると、張りつめていた地蔵の顔は、ザラザラと砂粒になって崩れてしまう。

戦後、掘り起こされた首なし地蔵の、顔の代わりに石が乗せられたが、その石が怒り顔に見えて、人々からおこりじぞうと呼ばれるようになった。

この物語を作品化するのに、私は一年間苦痛にあえぎ、苦痛に泣いた。構想を練ろうにも、涙ばかりが出て、いい大人が少年のように泣きじゃくってしまうのだ。

それに、原爆の惨事を言葉と声で表現するのは容易なことではない。原爆の投下、大爆発、被爆者の阿鼻叫喚あびきょうかん、焦熱地獄を一人で再現するのだ。

「だめだ、だめだ、とても作れない」もし出来上がったとしても、血圧の高い私は、お地蔵さんの顔が崩れ落ちる所で、脳卒中で倒れるだろう。

作曲家の悲劇は、作りかけた曲の音が、完成するまで頭の中で鳴り続けるのだ。焦熱地獄のうめきで、昼となく夜となく脳天がうずくのだ。七ヵ月を費やしても、曲はまとまらなかつた。挫折の末に、信仰心がなければ、この創作は不可能だと自覚した。

創作への意識をすべてお地蔵さんに委ね、地蔵真言を唱えて、曲の初めから作り直した。核兵器を怒り憎むのは、演じる私ではなく、慈悲心から怒る「おこりじぞう」になった。

物語が完成した時、視界はまた新たに開けた。私がお地蔵さんになって歌い語る時が来たのだ。それは身に余る光栄なのだが、完唱するには困難が山ほどあった。

まず丹田呼吸法を身に着けて腹を鍛えねば、原爆のシーンだけでバテてしまうのだ。お地蔵さんの涙より先に、感無量の私の涙で声が出なくなる。地蔵が怒り睨むと、私の頭は真空状態で真っ白になり、次の歌詞が出てこなくなってしまう。

一曲二十五分を三回も歌えば、精神的な疲れでくたくただ。

自分の感情にとらわれぬ平常心を培つちかうことが、私の仏教修業となったのだ。

それから二十年間。「おこりじぞう」を二十万人以上の母と子供たちの前で歌い続けてきた。五十歳にして、お地蔵さんに身も心も育てられた歳月となった。

今春、法華経の如来寿量品の《自我偶》を、「さとのりの花の芽ぶき」と名付けて創作し、CD出版した。それは、昨春急逝した妻へ贈るレクイエムだった。経文の現代語訳は、十数年前から趣味のように手直ししてきたもので、妻の死に遭い、妻に歌い語って供養したい思いが、曲を完成させてくれた。

自身で訳したことで、お釈迦さまの願いが、これまでより理解できた気がする。語り部歌手の道を歩んで三十年。私のたどり着いた仏教観だ。CDの出版は、その道を二人三脚で歩いてくれた妻と、二人で咲かせた花にしたかった。

声の続く限り、歌っていききたい。

(たかおか りょうじゆ)



連載 I
あの町この町
第 22 回

秘境の発見 —— 福島県・檜枝岐村

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀
(イラスト＝著者)

檜枝岐村にはきまつてアタマに「秘境」がついた。「秘境檜枝岐」である。読みにくい村名とあいまつて、なにやら山深い異界の雰囲気をおびていた。

県境をこえた新潟側に栃尾又、灰の又がある。「マタ」はたぶん地形の特徴をいうのだろう。山並みが左右から迫り、細い谷あい川筋が一本。栃尾又も檜枝岐もそんな地形をしており、どちらもながらく「秘境」つきでよばれてきた。

画家であり登山家であった上田哲農によると、ひとくちに秘境といっても、そこには条件があるそうだ。

一、どちらから入るにしても必ず峠を越えずにはならない。

二、峠を境にして「かつ然とひらけて新しくはじまる風景」がなくてはならない。

三、古びてはいるが、がっちりした構造の

大きな家が、すくなくとも数軒はたむろしていなければならぬ。

これが欠かせない三条件で、ほかにもあらましきことがある。たとえば「透明な空気」のなかのきれいに耕された斜面である。初冬など、そこを雪がうすくいろどっているのはいいものだ。家と家をつないで小石の多い小道があるとよし。その道は里の子供たちが鬼ごっこをする場所であり、星の夜はタヌキが酒を買いに行く道。また月の晩はキツネの親子が通る道でもあるわけだ――。

付帯条件はともかくとして、檜枝岐はまさしく条件をみたしていた。尾瀬側から入る場合はもとよりのこと、会津田島から向かうにしても、いくつもの峠越えをするし、最後の坂を下っていくと、思いがけず広々とした空間の中へと入っていく。「がっちり

した構造の大きな家」は、旧の集落のおおかたがそうだった。

南会津の館岩村、伊南村、檜枝岐村さらに只見川沿いの只見町、金山町、三島町までをひつくるめて「奥会津」というらしい。会津若松を入口と見立てての「奥」である。檜枝岐は奥会津のなかのどんづまり。お隣の館岩村、伊南村などが合併して南会津町を名のついでいるので、南の奥といったへんなくあいになった。

バスに乗るとよくわかるが、たえず川が道案内をする。まずは館岩川沿いを西に走り、これが檜枝岐川と合わさるところで九〇度転じて南へ向かう。とたんに田が消えて畑になる。小さな段々畑にソバの花が白い帯をつくっている。やがてその帯も消えて山また山。ウトウトしかけたころ、なにやら辺りが明るくなって目をさますと、



檜枝岐村遠眺

「かつ然とひらけて新しくはじまる風景」がある。とびきり長時間バスに揺られていたというでもないのに、はるかな秘境にきたような気がするものだ。

檜枝岐村が温泉を掘りあてたのはいつの

ことだったか。アルカリ泉、硫黄泉と二種あつて、きわめて良質、湯量もたっぷり。大きな温泉館、二つの公衆浴場のほか、五つの旅館、四十あまりの民宿に給湯してもまだあまる。湯の力が村のたたずまいを大

きく変えた。

かつては尾瀬に向かう道すがらに通り返るころだった。川沿いに古びた民家が並んでいた。木組みだけを残した家、軒の傾いた家がまじっている。籠を背負った人が道端に佇んでいた。ひとけのたえた夜ふけ、キツネの親子が通っていてもフシギはない。バスは村そのものを黙殺するように走り抜けた。

現在はまるつきりちがう。村域に入ると、まずは「尾瀬の郷交流センター」、体育館、レストランもそなえている。隣り合って森の温泉館「アルザ尾瀬の郷」、ここには温泉プール、また露天風呂もある。さらに木工展示販売部、釣り堀、スキー場、グラウンドとテニスコ

場。

以上はほんの入口の部であつて、橋を渡つて旧来の村の通りに入ると、大ホール・中ホール・会議室をもつ公民館、観光案内所併設の歴史民俗資料館、公衆浴場・駒の湯、檜枝岐歌舞伎で知られる伝統的な舞台、もう一つの公衆浴場・燧の湯、ミニ尾瀬公園、武田久吉メモリアルホール。

これらは近年にできたか修復された施設であつて、そのあいだに点々と六地藏、板倉塚、縁むすび・縁切りの神様といった歴史の生き証人役が居並んでいる。さらに尾瀬はもとより、会津駒ヶ岳、竜ノ門の滝まで控えている。もののみごとに観光立村を実現して、「平成の大合併」騒ぎなど、まるで対岸の火事というものだ。

まずいっとう奥の武田久吉メモリアルホールを訪れた。わが国植物学の草分けであり、また日本山岳会設立の発起人でもあつた。明治三十八年（一九〇五）のこと。そして山岳会誌創刊号に尾瀬紀行を発表。それまで文字どおりの秘境だった尾瀬ヶ原一帯をはじめて世に紹介した。

メモリアルホールは山小屋風のつくりで、アルプス地方の教会のようでもある。遺品や資料が丁寧に並べてある。たどっていくとわかるのだが、大正十一年（一九二二）、尾瀬貯水化計画がもち上がった。尾瀬ヶ原

全域を水に沈めてダム化しようというのだ。根強い反対運動にあつて立ち消えとなった計画が、昭和二十三年（一九四八）、装いもあらたにもち上がったのはよく知られているとおり。山上の巨大な水の宝庫は、くり返し利にさとい連中に狙われた。

同じ尾瀬を水源にしても、檜枝岐川は只見川や片品川のような大きな水流ではなく、ごく細い流れである。これが幸いして只見川流域のような大々的なダム化地域となるのを免れた。ダムの補償金で只見川一帯がわき返っていたころ、檜枝岐は忘れられた村だった。補償景気が終わりをみて、村々がいっせいに過疎化にみまわれるなか、こちらはあざやかな転身をやつてのけた。

狭い石畳の両側に色あざやかな旗が並んでいる。山裾の斜面と小さな台地を利用して歌舞伎が演じられる。もともと伊勢参りに出かけた人が覚えてきたそうだが、二百年に及んで村の芸達者が引きついできた。地芝居といわれるものはあちこちにあるが、これほど観光とタイアップして上手にピーアールしたケースも珍しい。

同じ歌舞伎がすぐ東の伊南村（現・南会津町）にも伝わっていて、茅葺屋根の舞台が残されている。建物としてはずっと立派だが、農村の伊南村ではすたれ、山村檜枝

岐ではつづいてきた。どうしてそうなったのか、それなりの理由あつたのこのようないないでもない。

村は檜枝岐川の西に細く長くつづく集落と、一つ大きくうねった辺りから東側にひろがる集落とからできており、さらにキリンテ地区、よなご地区、七人地区といった標示があるから、村の人にはもつとこまかい地域区分があるのだろう。

せつかくだから各地区のお風呂に入つてみることにして、まずは燧の湯。森の外れにポツカリと巨大な湯船を据えたぐあいで、湯の中にいて森の空気を吸っていられる。村の人にはわが家の延長のようで、持参の桶からタオル、石けん入れ、小道具がピタリときまり、脱衣、着衣の動作がいかにも自然である。顔つき、しぐさも屈託がない。毎日毎夜、これだけ大きな湯船につかっていると、おのずと清潔この上なく、屈託もなくなるにちがいない。

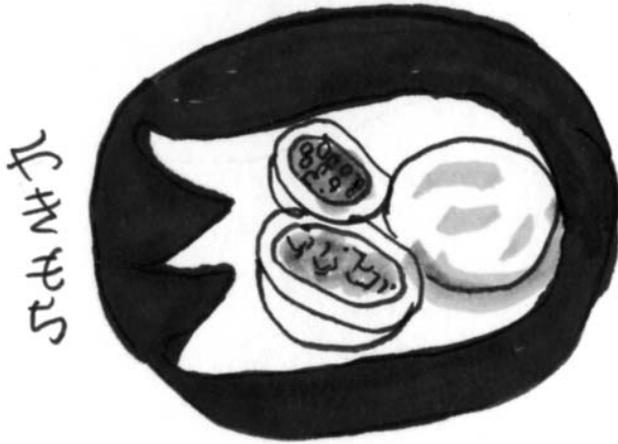
川の東側は総じて家のつくりが新しい。西からの新住宅にひらかれたのではあるまいか。

橋を渡ると「橋場のぼんば」といって、縁むすび・縁切りの石神さま。へんてつのない像だが、どういいういわくあつてか、木のお椀がつみ上げてある。

少し下手の奥まったところに「板倉」といって、柱や釘を使わない倉が残っている。奈良の正倉院と同じづくりだが、べつに正倉院をまねたのではなく、技術的な道理を追っていくと同じつくりになったまでのこ

と。木組のたくましさから実際以上に大きく見える。以前は村の要所ごとにあつて、風景の点景として風雪をへたものに特有の威厳をみせていたはずだ。民宿の夜の膳に山椒魚の天プラが出た。

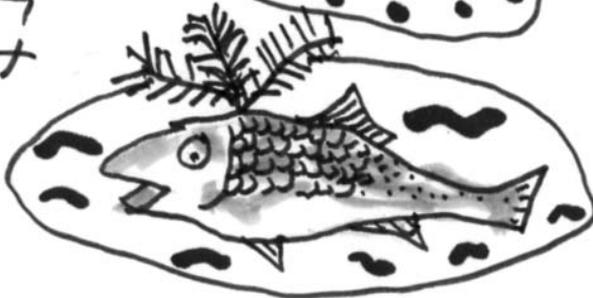
ほかに「はつとう」「ばんていもち」、しめくくりが裁ちソバ。山椒魚は標高の高い山間の溪流にいるものだ。カラ揚げ、塩焼き、天プラにする。滋養強壮、子供のカンの虫や夜尿症にも効き目があるとか。



たまごもち



山椒魚



ソウナ

木製品・曲輪



はつとう、ばんていもちのほかにも、いろんなもちがあるそうだ。ソバ粉でつくれる。季節の具をつつみこめば味が変わるし、むろん非常食になる。体験のつみ重ねのなから生み出された食べ物であって、レシ

ピでつくるのとわけがちがう。手や足や胃や腸など、人体の役割に応じて工夫されてきた。そのせいで食べやすく、保存や料理が簡単で、多少食べすぎても決して腹にもたれない。

と坂を下り、ひろびろとした水田地帯に入つたぐあいだ。
川の名が伊南川と変わると同時に家の向きにも変化があった。檜枝岐では家々は道路に向いていて、川へは背を向けたかたち。

どれといわず舌から喉にくるとき、なにか懐かしいような味がした。つくりはちがつていても日本人の味覚の記憶に応じているのかもしれない。

夜ふけに雨音を聞いた。山間特有のしぐれだろう。雨音が川音とまじり合つて、豪雨のような錯覚がある。しらしら明けにそつとカーテンを引きあげたが、向かいの屋根がこころもち濡れているだけ。ひやっこい空気が流れこんで、おもわずクシャミを一つ。

昼間四便のバスを利用して、旧伊南村へ出てみた。檜枝岐からだ

山村ではイワナを釣ったりする以外は、さして川に用がない。一方、農村の伊南村では川は重要である。水が死活を握っている。家は川へ向き、川を中心にして集落ができた。家が川に向いているのは水番の必要もあつてのことだろう。渇水時はうるたえる。大雨のときは堤が心配でならない。

檜枝岐の商店には木皿や木鉢、木匙、曲輪と並んで釣り具やヤスが置かれていた。溪流釣り、あるいはハヤをヤスで刺す。伊南村ではサオとアミである。水量のある川ではこちらのほうが有効だ。

そういえば竹で編んだ籠にもちがいがあつて、檜枝岐の背負い籠はタテ長で小造り、編み目がごまかい。山道は細い上に木の枝やササが張り出している。そこを通り抜けるには身にピツタリとつき、目のつまつた籠がいい。農作業が主体の伊南村では横に広く、大ぶりにつくられていてかまわない。

風土がつかつてきた土地土地の文化というものがある。それは暮らしの道具類にも色こくあとをとどめている。町村合併の号令をかけるのは簡単だが、同じ一つの地域でも暮らし方がずいぶんちがう。それは考え方、判断の仕方にも及んでくる。法令はどのようなふうにも変えられないが、暮らしの文化は法令のようにはいかなないのだ。

数少ないバス便を逃がしてはならない。バス停のありかを気にかけていたが、そのうちわかった。バスの運転手同士がケイタイで連絡し合っている。

「お年寄り一名、星さん宅前で待機中」

「了解。こちら只今、内川の手前です」

停留所に関係なく客をきちんとひろって行く。東京の電車のなかのケイタイはうるさいかぎりだが、こちらではこのような使われ方をしている。同じケイタイがやさしく、たのしいメディアにみえる。

檜枝岐にもどつて、こんどは村役場に近い駒の湯で汗を流した。アルカリ性単純泉で、木造りの湯船に澄んだお湯。すぐ裏手は檜枝岐川で、しみるような川音がする。

檜枝岐観光協会選定の檜枝岐音頭というのがあるそうで、いただいたパンフに五番までが出ていた。

ハアー 花の都をネ 追われた人がヨ
のがれかくれて 住む郷の

遠い昔も遠い昔も 今じゃ湯の香の

檜枝岐 檜枝岐

これは平家の落人伝説をふまえている。遠い昔のご先祖さんも、湯の香の里への変貌には目を丸くしているのではなからうか。

ハアー 春はうぐいすネ 夏川蝉ヨ

鳴く声たのしい お湯の里

二人揃つて 二人揃つて 聞くもうれし

檜枝岐 檜枝岐

湯上がりに神妙な顔で歌詞をながめいると、テラテラ顔のおばあさんから「どこからきた」と問われた。「東京から」と答えると、「ヒヤー、ぶつたまげたノー」。つづいて「アルザ」へ行ったかと問われたので「まだ」と答えると、ぜひ訪ねるようにとすすめられた。そこにはジェットバスやジャグジーもあるとか。現代のおばあさんは片カナ語を器用にマスターしておられる。

橋の下手で川がゆるやかに湾曲して、半円の川原になつている。ほつたからだに川風がここちいい。いいこちで丸石の上にはしゃがんでいた。対岸の繁みがサワサワと鳴り、風がやむと川音もどつてくる。道路が近いのに車の音がしないのは、音もつぱら細くひらいた上空に吸われていくせいらしい。

「秘境とは教えられないものではなくて、その人の心が発見するもの」

上田哲農が秘境談義のしめくくりにつけていた。なにやら自分の思いにもしめくくりのマルがついたぐあいだ、よつこらしよと腰を上げた。民宿にもどり、夕食までの昼寝をするでしょう。

(いけうち おさむ)



連載Ⅱ
明治のジャパノロジスト
F. ブリンクリーの
「美しい国ニッポン」①

武士道で入亜脱欧した若き英国騎士

旅行ジャーナリスト

沢木 泰昭

「観光」の語源には二つの意味があります。第一は「国の光を観る」(アウトバウンド)。もう一つは「国の光を観せる」(インバウンド)。原典は『易経』です。

前号まで連載の岩倉使節団のツアー(二八七年≡明治四年)は「国の光を観る」目的でした。欧米先進国の文明・文化をつまびらかに視察・観察して、明治維新の立国に役立てようというミッションです。そのレポート『米欧回覧実記』巻頭には岩倉具視の筆による「観光」の二文字が明記されています。

インバウンドの夜明け

もう一方の「国の光を観せる」観光はどうだったのでしょうか。今でこそ「Yokosai Japan」と、訪日旅行推進キャンペーンが実施されていますが、幕末維新には「国の光を観せる」余裕や意識は皆無に近かったはず。世界地

図が広がるなかで、鎖国は、日本の姿を国際的な視野で映す鏡を持たせない時代でした。

そんな鎖国が続いた日本(人)には、誇りと自信を持って「ようこそ!」と観せられるモノやコトが分かるはずがありません。強いて言えば、黒船でやってきたペリー提督ら招かざる客に対して、外交上のプロトコルや接待で和食を振る舞ったり、刀剣や陶磁器を友好の証しとして贈呈した程度でしょう。

……幕末から明治へ。この時代に「美しい国ニッポン」を観たのは門戸開放を迫った欧米の外交官やその周辺の外国人です。それも、観せられた、ではありません。たまたま観てしまったのです。

日本のインバウンドはこうして幕が開かれた。そう言ってもよさそうです。

忘れられたジャパノロジスト

その幕を開いたひとりがフランシス・ブ

リンクリー(Francis Brinkley 一八四一—一九二二)です。

幕末に来日し、日本に魅せられて四十五年間、日本を離れなかったアイルランド生まれの英国人です。明治の日本人が「脱亜入欧」の態勢をとるのと正反対に、ブリンクリーは「入亜脱欧」の姿勢を貫き通します。

肩書はたくさんあります。在日英国公使館補および守備隊長、お雇い外国人、日本海軍砲術学校主任教授、工部大学校数学教師、英字紙『ジャパン・メール』発行人、日本郵船会社顧問、『ロンドン・タイムズ』通信員……。さらには明治政府のアドバイザー、日本美術評論家、そして、インバウンド初の招致機関となる喜賓会の設立メンバー。日本を紹介する著作も少なくありません。明治のジャパノロジストです。

でも、ブリンクリーはなぜか、歴史の表舞台でスポットライトを浴びません。在日の外

国人仲間からも評価されず、浮いた存在でした。いわば脇役です。

それで今、古い資料のなかで風化しそうなフランシス・プリンクリーの名前を引っ張り出して、入亜脱欧の彼が観て、魅了されたニッポンをトレースしてみようというわけです。

ナガサキで決闘を見る

プリンクリーが来日するまでの足跡をたどります。

生まれはダブリン（アイルランド）に程近いミーズ地方。アイルランドは政情が悪化して、飢饉続き。新天地・米国を目指す人が続出する暗い時代です。ダブリンのトリニティ・カレッジなどで学んだ後、英国ロイヤル・ミリタリー・アカデミー（陸軍砲工学校）で砲術を習得します。その後、従兄である香港総督リチャード・マクドネルの副官として香港に駐在します。

一八四二年、アヘン戦争に勝利した英国は香港を拠点にアジアでの影響力を強化します。プリンクリーは、そんな香港にやってきました。その動機ははっきりしていません。彼は一八六四年（元治元年）にたまたま長崎に一時、寄港します。薩英戦争の翌年で、上海／長崎に定期航路が開設されるなど、日本におけるブリティッシュ・パワーが強

なっていたころです。

美港・長崎でプリンクリーはサムライの決闘を観てしまいます。勝った武士は自分の羽織りを死者に覆い、ひざまずいて合掌します。実戦経験がない二六歳の若者にとって、この光景は武士道への強い感動となり、日本への関心を高める発端になります。

それから四十七年後の一九二一年（明治四十四年）に明治天皇の逝去で、乃木將軍が殉死します。外電が「狂死」と打電するや、プリンクリーは「これぞ武士道の鑑」と病床から日本の武士道論を欧米に向けて発信します。

一九二〇年発行の『ブリタニカ』でプリンクリーは次のように武士道を解説しています。

「サムライは本質的に禁欲主義者で、自制を存在の規範としており、苦しみを勇敢に耐えることを徹底的に実践するので、自分自身の肉体に最も恐るべき苦痛を何のためらいもなく加えることができる」

ナイトが観たラスト・サムライ

プリンクリーが育った時代には産業革命が起こり、騎士道（Chivalry）のシンボルである馬が

必要でなくなり、乗馬してこそその騎士ナイト）は、国益を背に植民地で統治と金儲けに力を注ぎます。なので、同じアイルランド生まれのオスカー・ワイルドらによって「新騎士道」が論じられる有り様です。

一方の日本では、江戸の泰平天国で刀を忘れていた武士たちが尊皇攘夷をめぐって武士道に目覚めます。こんな対照が、騎士の家系にある若きプリンクリーには「美しい国ニッポン」として焼きついたようです。

長崎で観たラスト・サムライの姿が、やがては日本文化を欧米にも発信する契機となり、明治政府の後見人とも言えるジャパノロジストへの出発点になったようです。

〔以下次号〕

（さわかき やすあき）



外国人仲間から日本びいきを揶揄されるプリンクリー（ワーグマン画『ジャパン・パンチ』。横浜開港資料館）



連載Ⅲ
ホスピタリティの
手触り43

社交のきついリゾート

旅行作家 山口 由美

効果の上がる
英語上達法とは？

先日、新聞のアンケートで「効果の上がる英語上達法」として、第一位が「海外に旅行し、できるだけ英語で話す」とあった。

留学経験があるわけでもなく、強心臓でこなしてきた私のインチキ英会話だが、わが意を得たりという気がしてしまった。確かに、あくびをかみころしながらテキストで覚えた単語や言い回しよりも、大恥をかいたり、苦勞の末に通じたせりふのほうが絶対に忘れない。

だが、そうは言っても、普通の旅行を滞りなく遂行するための英語なんて、実際のところ、たかが知れている。

例えばレストランに入って、メニューを讀んで注文して、お勘定をする。メニュー

なんか指させばいいのだし、あとは自分の好みの飲み物を伝えるくらい。ちよつと難度が高いかなと思うのが、アメリカのレストランなどで多い、本日のお勧め料理をべらべらと口頭で言われることだが、これは、お勧め料理を選ばなければいいまでだ。LとRの発音に自信がない場合は、お勘定の際、ビールと間違われやすい「ビル」ではなく、「チェック」と言えば間違いない。

本当の問題は、このレベルから、その先はどういくかなのと思う。だが、普通に旅行をしている限りは、なかなか「○○を下さい」「○○をしたい」以上の会話を必要とする場面に遭遇しない。ホテルやレストランやお店の人は大抵忙しい。取り交わす用件が済んでしまえば、それでおしまいである。仕事ならいざ知らず、一般の観光旅行であれば、長い会話を望むなら現地であ

人でもつくるしかない。英会話（英語に限らずだが）が上達する最高の方法は、英語（もしくはその外国語）を話す恋人をつくることだという話はなるほどと思う。

だが、恋人をつくらなくてもシャワーのように英語を浴び続けられる環境が実はある。それが、小規模なリゾートや、ガイドと長期間行動を共にするエコツアー、小規模な川のクルーズなどである。その典型とも言えるのが、アフリカのサファリロッジだ。

小規模リゾートとエコツアーが合体したサファリロッジでは、日々まさしく「英語漬け」。しかも任天堂DSのゲームソフト「英語漬け」と異なるのは、逃げ場がないこと。スイッチを切れれば終わりというわけにはいかない。こんなことは、普通の旅行ではありえない。一週間のサファリで、英会話学校三カ月分くらいの効果はあると思う。本



社交のきついリゾートのテーブルはこんなふう。ここに全員が同席する

当に冗談でも何でもなく、自分自身、英語の会話力とヒアリング力が格段に上達したのは、アフリカを頻繁に旅するようになってからである。抽象度の高い単語に弱く、サイダのカバダのホロホロ鳥だの、野生動物の英単語に強くなるのが難ではあるのだが。そう、冒頭に挙げたアンケートの結果が

真実ならば「サファリに行けばいい」ということになる。しかし、現実のアフリカ旅行のマーケットでは、こうしたサファリロツジは、そのあまりに「英語漬け」な状況ゆえ、日本人には不向きと敬遠されている。

特に日本人が恐れるのは、必要事項をやりとりするガイドとのコミュニケーションではなく、同行者との社交的フ

リートーキングだろう。こうした「英語漬け」系リゾートでは、食事のテーブルが、最後の晚餐のように大きなものが一つきりというケースがよくある。みんなで会話を楽しみながら食事をする、と言えば聞こえはいいが、英語嫌いには、地獄のようなシステムである。

例えば南太平洋のフィジーにも、こうしたワンテーブル・リゾートがあり、それゆえに日本には紹介されていないところが多い。

これを回避する方法はあるのだろうか。以前、サファリロツジの取材に行ったとき、その辛さにたまりかねた同行カメラマンが「別のテーブルにしてほし

い。なぜなら私は英語が苦手だから」と必死に訴えたことがあった。これまた日本人によくあることだが、苦手と言いつつ単語や文法の能力は、そこらのラテン系より長けていたりする。必死に頭の中で英作文したカメラマン氏の英語も文法は完璧であった。そして、なんと彼の必死の訴えは、一笑に付されてしまったのである。

こうした社交のきついリゾートで、別のテーブルにしてもらえただ一つの方法をお教えしよう。それは「二人きりでロマンチックな時間を過ごしたいから」と言うこと。男同士、女同士、まったく関係のない者同士の場合は、なかなか勇気のいる一言だが、カップルならば、たとえ倦怠期の夫婦であろうと、こう言えば納得してくれる。

世界には、まだまだ日本に紹介されていない素晴らしいリゾートやエコツアーやクルーズがたくさんある。だが、悲しいかなその多くが少人数を相手にする、社交のきつい旅だ。だったら、いっそのこと「英語上達のため」と銘打って売り出したらどうだろう。「英語漬け・アフリカサファリ九日間」なんてタイトルを付けたら、案外、興味を示す客層がいるかもしれない。英会話教室より楽しいことだけは事実である。

(やまぐち ゆみ)

知られざる南大東島

財団法人日本交通公社観光文化事業部 研究員

安達 寛朗

はじめに

深海に囲まれた絶海の孤島、南大東島。沖縄本島の東三百六十二キロメートルに位置し、面積わずか三十平方キロメートルほどの小さな島に千四百四十八人（二〇〇五年国勢調査）が暮らしている。那覇空港からは五十人乗りの飛行機で七十分ほどだが訪れる旅行者はあまり多くはなく、一面に広がるサトウキビ畑には穏やかな時間が流れている。

この南大東島で、二〇〇七年三月に「南大東島観光地域づくりシンポジウム」が開催された。筆者もこのシンポジウムに参加する機会があり、これまであまり知られていなかった南大東島の魅力にふれることができた。そこで、南大東島の特異な形成過程や、その結果形成された空間と住民とのかかわり合いの歴史など、この島の特徴や面白さについてご紹介させていただきたい。

南大東島の形成史

〜五千万年の神秘〜

南大東島は沖縄県に属しているが、その誕生の地は遠く離れた赤道付近である。今からおよそ五千万年前に火山島として生まれたこの島は、フィリピン海プレートに乗って長い距離をゆっくりと移動してきた。このフィリピン海プレートは途中でぐくぼんでおり、移動の過程でこの島は少しずつ沈んでいく。しかし、沈む速さよりもサンゴの成長の方が速かったため、島が沈んだ分だけサンゴが成長していったのである。このような状態が長く続き、深海からそびえ立つ現在の南大東島の姿が形作られていった。そして今からおよそ二百万年前に、琉球海溝手前のプレートとのたわみに達し、南大東島は海上にその顔を出すに至ったのである。このような過程を経て誕生した島は世界でもほとんど

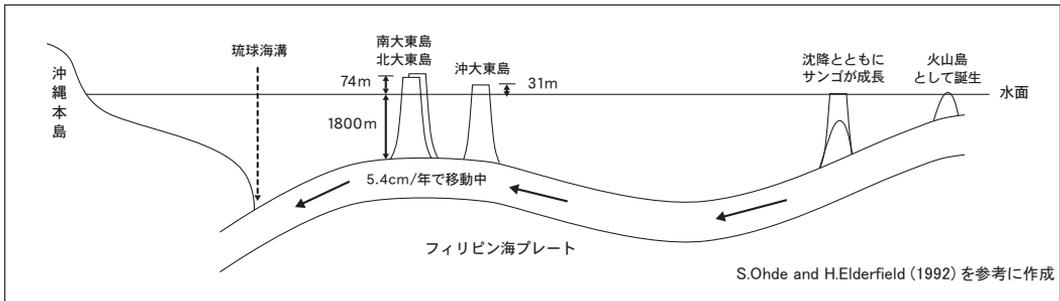
例がなく、非常に珍しい存在と言える。

さらに、この島には目に見える地殻変動の証拠が存在している。それが「バリバリ岩」であり、高さ数メートルの岩の間に幅一メートル程度の割れ目が奥まで続いている。この岩は、移動するときに島にかかる力によってまさに「ばりばり」と割れたものであり、地球のダイナミズムを実感することができる。

このような特異な形成過程を経ているため、南大東島の景観は他の島とは様子が大きく異なっている。この島は断崖絶壁に囲まれ、島の周縁部が高く（最高標高約七〇メートル）、中心部にはラグーン（礁湖）の



大東諸島の位置関係



大東諸島の形成過程（模式断面図）

跡である平地が広がっており（標高数メートル）、ドーナツのような地形をしている。このため、島の内部からは海はまったく見えず、一面に広がるサトウキビ畑は、離島というよりもむしろ大陸的な雰囲気醸し出している。周縁部は幕（ハグ）と呼ばれ、モクマオウなどの防風・防潮林が植えられ、島を囲む断崖絶壁はそのま

ま一、八〇〇メートルの深海に落ち込んでいる。沖繩につきものの砂浜はただの一カ所もない。そのため港湾の整備が非常に困難であり、現在でも船の乗り降りには、クレーンで吊り上げた小さなおりに人が入って、船と陸との間を行き来しなければならぬ。また、南大東島にはたくさんの池がある。沖繩県には一ヘクタール以上の天然の湖沼は十四しかないが、そのすべてがこの小さな島にあるのである。沖繩の島々はサンゴ礁を起源とするものが多く、水がたまりにくいスポンジのような構造となっているため、湖沼が形成されにくい。南大東島も同じようにサンゴ礁を起源としているため、本来であれば水がたまりにくい構造である。それでもたくさんの池があるのは、池が海とつながっているためである。つまり、スポンジのような構造であるがゆえに池の下には海水の層が入り込み、島に降った雨はその海水の上にとまっているのだ。このため、池の水位は海面と同じように潮汐の影響を受けて上下している。また、池の水には塩分が少し含まれるため、雨が降らなかつたり水をくみ上げすぎたりすると水の塩分濃度が上昇してしまう。サトウキビの生産高を上げるには、この塩分濃度をコントロールすることが重要で、細心の注意

を払って水を利用しているとのことである。なお、これらの池は開拓が進みサトウキビの生産が増えるにしたがつて相互につながれ、刈り取ったキビを運搬する手段として活用された。この水路は今でも健在で、池を巡るカヌーツアーも行われている。

このように、南大東島は存在そのものが地球のダイナミズムを体現しており、その景観には特異な形成過程の歴史が深く刻み込まれている。そして、それは机上の知識にとどまることなく、日々の暮らしに大きな影響を与えている様子をも垣間見ることができたのだ。仮にこの島への移動だけで丸一日を要したとしても、この島で目にし実感することができるのは、世界でも特異な五千万年の神秘であり、その結果形成された空間と住民とのかかわり合いの歴史なのである。

南大東島の開拓史 〜百年間の軌跡〜

この島は、およそ百年前までは手付かずの無人島であった。一九〇〇年一月、島島の開拓で名をなした玉置半右衛門が、八丈島出身の二十三人を開拓団として送り込み、ピロウの密林に覆われたこの島の開拓を始めたのである。



サトウキビの刈り入れの終わった南大東島。展望台から製糖工場を望む

その後、玉置半右衛門は第二陣、第三陣と次々に開拓団を入植させ、この島をサトウキビの島に変えていった。

しかし、その作業は困難に満ちていた。すでに述べたように、この島は断崖絶壁に囲まれているため、上陸するだけでも相当の苦勞を伴う。また、当初用意していた飲み水は上陸後わずか二日で飲み尽くしてしまい、ボウフラの群生し

ている濁水などを布でこして利用していた。そのようななか、上陸後六日目に入植者の一人である沖山権蔵が淡水の池を発見したのだった。その後この池は権蔵池と名付けられ、水くみのために島内部への最初の道が作られたという。このように、開拓からまだ時間がたっていないため、地名の来歴とともに開拓時の記憶が比較的よく残っている。

地名といえは、この島の住所にはシンプルなものが多い。この村の字は、「池之沢」、「北」、「旧東」、「在所」、「新東」、「南」である。「在所」というのは、この島を製糖の島に変えた「玉置商会」の事務所があった場所であり、ここを中心に「北」や「南」などと名付けられた。（権蔵池はもちろん「池之沢」にある。）また、「西」という字がないのに気づかれた方もいるかと思うが、これは玉置商会の事務所がそもそも島の西の方にあったためであろう。このように、島の住所は玉置商会の事務所を基準に付けられており、いかに製糖業中心、玉置商会中心の島づくりが行われてきたかを如実に物語っている。

やがて事業が軌道に乗ると、多くの入植者がやってくるようになると、農地の拡大や民家の建築材料、製糖の燃料などのため、ピロウは次々と伐採されていき、当初の大密林は次第に

その姿を消していった。そこで玉置は乱伐を禁止するとともに、小笠原や八丈島などから種子種苗を取り寄せ植樹を奨励する。ただ、どの樹種がこの島に適しているかは分からない。そこで、玉置は大東神社の前に試験場を設置し、どの樹種がこの島でよく育つかを実験したのである。その結果、モクマオウやリュウキュウマツなどが適していることが分かり、百八十万本余りが植えられていった。大東神社の試験場には現在でも当時植えられた樹種が生い茂り、幕（ハグ）に植林された防風・防潮林は台風などの潮風から村民の暮らしを守っている。

ここで沖繩について詳しい方であれば、沖繩なのだから神社ではなく御嶽（うたき）なのは？と思われる方もいるかもしれない。しかし、思い返していただきたいのは、この島を最初に開拓したのは八丈島出身者だったということである。大東神社は、八丈島が昔から民間信仰の強い島だったことから、開拓着手後まもなく建立された（一九二〇年に現在の場所に移転）。そのほかにも、八丈太鼓を源流とする大東太鼓や江戸相撲など、八丈島の風習がこの島には色濃く残っている。幕をハグと呼ぶのも、八丈島の方言（歯ぐきの意）である。その一方で、開拓が進むにつれて沖繩からの入植者も増えたた



八丈太鼓を源流とする大東太鼓。子供のころから練習を重ね、郷土愛も育まれる

め、現在では祭りのみこしを担ぐかたわらエイサーも舞われるなど、八丈島と沖繩が融合した独特の文化が形成されている。

このように、開拓からわずか百年余りしかたっていないため、その記憶が今もよく残っている。そして、開拓の過程で形成され、この島固有の諸条件が反映された独特の文化は、今も少しずつ変化を続けながら住民の暮らしのなかに確かに息づいているのである。

これからの南大東島

次の百年に向けて

二〇〇〇年一月に、南大東島は開拓百周年を迎えた。島の歴史五千万年と比べれば非常に短い時間にすぎないが、この百年の間に島の様相も大きく変化した。その変化のなかには、島の財産として誇っていくべき部分や、逆にこれから解決すべき課題として位置付けられるべきものもある。そこで、南大東島では次の百年を見据えた「島まるごとミュージアム構想」を進めている。この構想では、南大東島の自然や歴史・文化などの資源を掘り起こして島民間でその価値を共有する「宝探し」や、開拓の過程で減少したダイトウオオコウモリの餌場を増やすための植林などを行う自然環境の保全・復元、南大東島の資源について学ぶ機会を設けその価値を次世代に伝える自然・文化遺産の継承などを行っている。

そのほかにも、二〇〇一年に南大東村商工会の事業で実施したモニターツアーにより、南大東への航空運賃の団体割引等の適用が決まり、またサトウキビを原料にラム酒を造るプロジェクトが沖繩電力のベンチャー事業として立ち上げられ、お土産として販売されるなどの取り組みも行われている。このような成果もあり、南大東島を訪れる人はまだ少ないながらも順調に増加を続けている。この島を気に入った観光客が、リピーターとして訪れたとき友達を連れてくる、といったこともよくあるそうだ。那覇と南大東を結ぶ路線も、機材が少しずつ大型化されてきており、観光産業は順調に成長を続けていると言えよう。

南大東島は、五千万年に及ぶ形成の歴史や、百年余りの開拓の記憶など、非常に独特な資源を有しており、またそれが時間とともに変化を加えながら現代にも引き継がれ、島の景観のなかに立ち現れているという稀有な場所である。さらに新たな試みにも取り組むなど、着実に次の百年に向けた歩みを進めている。この島がこれからどのように変化していくのか、今から楽しみでならない。(あだち ひろあき)

参考文献

S. Ohde and H. Elderfield (1992), "Strontium isotope stratigraphy of Kita-daito-jima Atoll, North Philippine Sea: implications for Neogene sea-level change and tectonic history," *Earth and Planetary Science Letters*, 113, pp.473-486.



旅の図書館

新着図書紹介

もう一度泊まってみたい宿というのは、「温泉」、「料理」、「部屋」、「もてなし」などの施設やサービスの質に加え、高い満足感と強い印象を与えてくれた場所ではないだろうか。読者の中にも「心から癒やされた宿」、「泊まってよかった宿」、「人には教えたくない宿」など、自分好みの宿があると思う。

人それぞれ、旅の目的や行き先によって泊まりたい宿には違いがあるが、一つでも多くの満足感（＝癒やし）を享受できる宿が自分にとって「心地いい宿」になる。旅をするときは、自身の基準で宿を探すことになるが、宿の良しあしは一度泊まってみないと分からないものだ。筆者の経験だが、もう二度と泊まりたくないと思っただ宿がいくつもあったように記憶する。そのときは、宿の雰囲気や楽しみが疑似体験できるような本が欲しいと思ったものだ。

今回紹介する『心地いいじぶんの宿』（森まゆみ、小林しのぶ、かわいももこ共著、JTBパブリッシング）は、旅の経験豊富な、梅桃桜お泊まりシスターズ三人が選んだ、泊まってよかった上質な宿を紹介した本。旅慣れた女性が泊まって満足する宿は、ありそうで少ない。人生半ばの三人の女性たちが好む、おすすりめできる宿、泊まってほしい上質の宿二十五軒プラスαを紹介

している。

お泊まりシスターズ三人が提案するいい宿の条件は、次の十項目。

- 一・清潔である
- 一・量がほどよく印象に残る料理
- 一・宿主の姿勢は「社長」ではなく「主人」である
- 一・館内のどこかに主人のこだわりがある
- 一・女将がチャラチャラしていない
- 一・スタッフに笑顔があり、客の立場で働いてくれる
- 一・館内施設、客室はこけおどかしでない
- 一・湯心地がいい
- 一・満室でも静かで、枕や布団が選ばれ寝心地がいい
- 一・泊めてやるといった威圧感がない

本書で紹介されている宿は、この条件をほとんど満たした所だけを厳選。場所、施設規模、もてなし、料理、温泉など、異なる個性と趣を持つ宿ばかりそろっている。梅桃桜の三人が独自の視点で取材をした結果、読者自身がそこに宿泊しているような錯覚を起こすほど臨場感のある内容になっているところが心地いい。

本書のセクション二では、梅桃桜の三人が「泊まってよかった宿」と題して、それぞれの宿の体験取材レポートとともに、施設内外、料理、温泉、周辺の景色などの注目ポイントを写真入りで分かりやすく紹介。文中では、宿のご主人や女将さ

ん、仲居さんなどの人柄やもてなしなど、「人」に焦点を当て、宿の雰囲気を具体的に伝えている。これがこの本の一番の見どころだ。旅のプロの立場からの、最近の宿泊事情を踏まえた観察力、切り口にも説得力がある。

また、セクション二の「私の好きな宿」で、三人のこれまでの宿泊経験をもとに、ペンションから民宿、文化財の宿泊施設など、形態の異なる宿を取り上げ、それぞれの宿の特性や使い分けについて提案している点も注目される。

最近、ガイドブック的な紹介本が多いなかで、本書は、三者三様の宿への熱い思い入れが心地よく伝わってくるぜひ一読したい一冊と言える。七月下旬には、お泊まりシスターズの続刊「ラダの中からキレイになる宿」が発売予定というから、ユニークかつ臨場感のある三人の宿泊体験レポートに期待したい。（江口哲夫）



A5判 192 ページ
定価 1,680 円
JTBパブリッシング

■定期刊行物

- 旅行年報（年更新、毎年九月発行）
過去一年間の旅行に関する動向と展望をデータ中心に解説。
- 旅行の見通し（年更新、毎年一月発行）
今年一年間の国内旅行・海外旅行などの量的見通しと質的变化。
- 旅行者動向（年更新、毎年七月発行）
国内・海外旅行者の意識と行動について実施する当財団「旅行者動向調査」の分析結果をビジュアルに解説。「二〇〇六」では、「団塊ジュニア」「リピーター」「温泉ニーズ」を特集。
- 観光文化（年六回、奇数月二十日発行）
旅や観光の文化に関する当財団の機関紙。
- Market Insight（日本人海外旅行市場の動向）
（年更新、毎年七月発行）
日本人海外旅行マーケットの構造的な変化とその要因を詳細に解説したレポート。当財団独自調査。〇六年より発行。

■観光読本（二〇〇四年六月発行）

東洋経済新報社の読本シリーズ。一九九四年の初版刊行から十年を経て、内容を大きく見直した改訂版。観光全般に関する客観データや現象を解説。またそれらに基づく分析・提言など。

■その他刊行物

- 美しき日本
日本の美しい観光資源を紹介する写真集。わが国を代表して世界にアピールでき、わが国の基調となる観光資源三百九十一件を選定し、写真と解説文で紹介。外国語版（英語・中国語・韓国語）「Beautiful Japan」も発行。
- エコツーリズム さあ はじめよう！
エコツーリズムを目指すすべての人に向けて環境省が編集し、当財団が発行した手引書。
- ※刊行物に関する問い合わせ、冊子をお求めになりたい方は
財団法人日本交通公社 観光文化事業部まで。
電話：03・52008・4704 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

●今年、宮澤賢治生誕百十一年。次号の特集は、彼が、育った自然環境や人々への思いを「イーハトーブ（岩手県）」と名付けた「理想郷」の姿を探ってみます。

調査研究たより

●これからの観光地づくり（既存観光地の再生）には、観光関連産業とは直接縁のない住民やNPOなどとも協力しながら、地域全体のホスピタリティを高め、いく、観光地におけるまちづくりがとて重要となります。

●当財団では、そうした実践的な取り組みを北海道、阿寒湖温泉で進めています。すでに今年度で七年目に入りますが、最初の二カ年で十年後の将来ビジョンである『阿寒湖温泉再生プラン二〇一〇』を外部有識者＋住民参加型で策定しました。

●その後は、当財団の自主研究費も投入しながら、ビジョンに掲げられた各種プロジェクトの実現に向けて、さまざまなコーディネート業務を展開しています。国土交通省や環境省など国の補助事業導入を支援することも主要な業務の一つです。

●昨年度からは、「地域再生マネージャー」という総務省系の事業を活用し、当財団の研究員を阿寒湖温泉に適宜派遣し、着地型の滞在プログラムづくりや再生プランの第三期計画づくりなど具体的な取り組みを進めています。

編集後記

◆二世紀は「こころの時代」と呼ばれています。シニア世代を中心に仏教への関心が高まり新規雑誌の発刊が相次ぎ、四国遍路の旅人もにわかに増えています。不安な世相を背景に心の平安や癒やしを求め、強い願いがそこにはあります。お寺さんと社会はいかに縁起再生を図れるのか、仏教の原点に立ち返って考えてみました。

◆社会との縁起再生を求めて立ち上がり、活動をしているお寺さんについては本号でその一端をご紹介しました。東京都港区の愛宕にある曹洞宗の青松寺では上田先生を塾長に招いて「仏教ルネッサンス塾」を開設し、二〇〇三年五月より本年四月までの四年間に二十五回、仏教関係者を講師に招いて幅広く仏教のありよう、可能性、諸問題を考え話し合う講演会を開催してきました。本塾において「ボーズ・ビー・アンビシャス」の精神のもと宗派を超えた若手僧侶たちが生き方を模索し合う場も生まれました。中締めのお祭りとして開催された第二十五回の講演会に参加する機会を得ましたが、上田塾長の全二十五回の総括報告を聞いた後、全国から参加した老若男女より意見、感想などが活発に発表されたことが印象的でした。

◆仏教は日本の精神文化を支えてきました。昏迷に満ちた今日の世相に光明をともし明日への活力を得るために、「仏教ルネッサンス」が大いに期待されます。（宇八）



観光文化 第184号

第31巻4号通巻第184号

発行日 2007年7月20日

●
発行所：財団法人 日本交通公社
東京都千代田区丸の内1-8-2
第1鉄鋼ビル
〒100-0005 ☎03-5208-4701
<http://www.jtb.or.jp>

編集室：東京都千代田区丸の内1-8-2
第2鉄鋼ビル 旅の図書館内
〒100-0005 ☎03-3214-6051
<http://library.jtb.or.jp>

編集人：外川宇八
発行人：新倉武一

●
印刷所：JTB印刷株式会社

禁無断転載

I S S N 0 3 8 5 - 5 5 5 4